

クルド民族は歩み続ける

日本クルド学生連盟幹事長 瀬谷公基

今回私たち日本クルド学生連盟は2018年8月5日から8月12日までイラク・クルド人自治区に訪問し、現地の各政党の学生連盟と交流、討論を行っていました。今回訪問したイラク・クルディスタン地域（以下 南クルディスタン）の都市の中で自分が興味深かった都市であるスレイマニヤとスレイマニヤのクルド愛国同盟（以下 PUK）の学生連盟について考察し、今後の日本民族とクルド民族の学生同士の交流や世界学生連盟の展望について書いていこうと思う。

私たちが南クルディスタンの首都であるエルビルからスレイマニヤに到着した際に思ったこととしてはエルビルと比較して宗教的に寛容であり、バーや飲酒が出来る店舗もエルビルと比べると多い印象だった。女性の肌の露出も南クルディスタン来る途中で寄ったヨルダンなどと比べて肌を露出している女性の姿も多かった。このスレイマニヤはクルド自治政府の第二の都市である。しかし、首都のエルビルとは違い、近代的な建物はあまり多くなく、昔ながらの下町の様な印象を受けた。スレイマニヤに到着した後、私たちはPUKの学生連盟と私たちが宿泊する予定のホテルでお互いの自己紹介と意見交換を早速行った。まず、彼等と話した第一印象としては好奇心旺盛であるという事である。お互いの自己紹介を一通り終えた後、日本について色々な質問を投げかけてきた。なんでも彼らクルド民族から見た日本人のイメージとしてはまじめで勤勉な民族でトヨタなどの巨大企業を経営するお金持ちだという印象を抱いていると彼らは私たちに教えてくれた。しかし、日本の事をあまり知らない。そしてだからこそ今後は御互いの事を知る事から始めようと提案してきた。その後、私たちは彼らと具体的に遠く離れた地ではあるが有意義な交流をいかにして図るかという話を進めて行った。しかし、彼らと私たちの間には温度差が存在していることを薄々実感した。私たちは同じ、アジア民族として彼らと共に手を取り合いたいと考えていたのであったが、彼らは私たち日本人の事を彼らを苦しめてきた欧米列強と同一視しているのではないかという事である。そこで私はかつて日本も幕末、明治維新の時期に西洋諸国に翻弄されていた中でなんとか民族自決のともしびを私たちの先人が守ってきたことについて説明をした。そして、私たちはあなたがたクルド民族とはその様な点で同じ立場にいる友人だと考えて居る事について説明をした。その話を終えた後、彼らは目の色を変えたかのように親しく接してきた。どうやら、幕末、明治維新时期のことはあまり、クルディスタンでは知られていない様で彼らは驚いていた。その後彼らは私たちを夕食に招いてくれた。その後私たちはスレイマニヤにある遊園地に行き、現地の同世代の方々と交流を図り有意義な形で一日目が終了した。

2日目は朝食をとったのちPUKの学生部長と面会した。学生部長は気さくな方で私たちがいま、進めようとしているインターネットを通じた文化交流や、日本、クルディスタン双方の学生を御互いの国に訪問して文化交流を図る短期訪問、クルド人難民支援への相互協力について話し合った。学生部長はこれまであまり日本との交流は無かったので新たな試みとして非常に興味がある。今後はより一層協力をしていきたいと私たちの提案に対してこう返答をして下さった。その後、学生部長の招きで、元PUK代表であり元イラク共和国副大統領である2017年に亡くなったジャラルタラバニ氏の墓に参拝する事となった。タラバニ氏の墓はスレイマニヤを見下ろす事の出来る丘の上にあり、非常に感慨深い印象を受けた。その後、私たちはアンナスルカミュージアムと言うサダムフセイン政権が使用していたクルド人強制収容所の博物館を訪問した。展示としては実際にクルド人がサダムフセイン統治下で如何に無下に扱われていたのかについて実際の写真やジオラマ、遺品などを用いて説明されていた。また、ISとの戦闘終結後に設置された如何にクルド民族がISと戦い犠牲を払ったのかという展示を見る事も出来た。私はその展示の一つである国連から民族自決を認められないクルド人と言う風刺画を見て、涙した。そして、このような悲劇を繰り返さないためにも彼らの民族自決は達成されなければならないと改めて強く実感した。

展示を見終わり、エルビルに帰る前に学生部長やPUKの学生メンバーたちと昼食を共にした。その中で感じた事としては自らが所属する政党を最優先する現状のクルディスタンの各政党の学生連盟の思考回路では彼らの民族自決は達成されない。

ALL Kurdistan として団結しなければいけないという認識を持った。また、クルディスタンだけの問題に還元するのではなく戦後、国連を中心とした国際秩序が作ってきた数々の民族問題を解決する上でも政治的イデオロギーや党利党略に左右されない学生が主体となる学生版国連である世界学生連盟を構築することこそがイデオロギーを超越して今現在世界中に存在する民族問題解決のために重要だと言う認識を改めて強く認識した。